P-25 クラウン・ブリッジ症例の長期経過観察

○村上 繁樹・内田 康也
九歯大・補綴2

A Long-term Clinical Report on Fixed Prosthesis Cases

○Shigeki Murakami and Yasunari Uchida (Prosthetic Dentistry 2, Kyusyu Dental College)

Key words: Crown / Bridge / Long-term clinical report

目的

歯冠補綴物は、加齢に伴い経時的に変化していくものであり、ときには予想もしないトラブルも発生する。補綴物を装着することが最終の目的ではなく、補綴物を長期にわたり観察することが大切である。術後管理の一つであるリコールでは補綴物の耐久性の問題、補綴物と生体との調和およびトラブルの発生に対して対処しなければならない。

方法

クラウン・ブリッジを施した患者の中でトラブルが生じた2症例の経過観察を行った。

結果および考察

症例1: 1の歯根破折の補綴処置

初診は1980年5月で、50歳の女性である。主訴は審美障害および不良補綴物の再製であった。保存処置を主体とした補綴前処置の終了後、651|1, 543|に陶材焼付鑄造冠, 3|, 35に金合金インレーおよび5|6|7ブリッジを装着したが、すべての補綴治療が終了したのは1981年2月であった。

1985年に外傷のため、1|に歯根破折が生じ、支台築造と一緒に陶材焼付鑄造冠が脱落した。そのまま接着性レジンセメントで再装着したが、約2年後に脱落した。そこで、矯正の挺出をはかり、1987年10月に陶材焼付鑄造冠を装着したが、歯頸線が不揃いであった。その後、再度歯根破折が生じたため、1995年6月に抜歯し

た。歯根破折の原因として、歯牙挺出で使用したスクリューポストを支台築造にも利用したために加圧のためであろうと考えられる。同年11月に2|1|1ブリッジを装着した。

症例2: 予後を考慮した下顎臼歯部補綴物の設計およびポンティック下の骨隆起

初診は1977年4月で、主訴は上顎前歯部歯肉炎と不良補綴物の再製であった。歯周処置を主体とした補綴前処置の終了後、21|12に陶材焼付鑄造冠, 7|6|5|, 3|4|5|6|7のブリッジを装着した。下顎臼歯の歯冠長が短いために、維持形態およびポンティック基底面形態の設計に苦慮した。

1983年11月に7|の支台装置が動揺したため、ブリッジを除去した。ブリッジの再製時に、半固定性ブリッジを製作し同様なトラブルに対応しようとした。しかし、他院で567欠損部にパーシャルデンチャーおよび7|6|5|ブリッジを装着されたが、リンガルバーによる咀嚼障害のために来院した。今度は3|4|5|6|7の可撤性ブリッジを1987年12月に装着した。一方、7|6|5|ブリッジは1992年11月に撤去し5|を歯周病のために抜歯、ポンティック下の骨隆起切除を1993年3月に行った。その後、65|欠損部にはパーシャルデンチャーを装着した。

結論

クラウン・ブリッジ症例を長期的に観察すれば、何らかのトラブルが生じる。その解決法を考えたり反省することにより得られた教訓は、今後の臨床を行ううえで非常に役立つと思われる。